

# 劉邦について

2017年3月17日

国土政策研究会  
会長 岩井國臣

# 劉邦について

## 目次

はじめに

第1章 概要

第2章 呂公歡迎の宴

第3章 雌伏の時期

第4章 劉邦の旗揚げ

第5章 劉邦軍初期の戦い

第6章 劉邦の関中入り

第7章 彭城の戦い

第8章 垓下の戦い

おわりに

## はじめに

今はネットの時代であり、ほとんどのことがネットで調べればわかる。

劉邦は、漫画や小説、あるいはテレビや映画などで見る機会が多いので、興味を持つ人が多く、ネットの書き込みも多い。しかし、その内容は、断片的で、知りたいことがすぐに判るというものではない。劉邦の全貌が比較的よく判る小説で、しかも大変面白い小説として、宮城谷昌光の「劉邦」（2015年7月、毎日新聞出版）があるが、それも大事な場面が抜け落ちていたり、関連する都市の説明がなかったりして、劉邦について知りたいことが全部判るというものではない。小説であり、学術書ではないので、それは当然のことではあるが、もし補足的な説明がネット上に見つければ私たちにとって随分助かる。私はそんな思いがして、今回、この「劉邦について」というホームページを作った。それはもちろん小説や学術書という大げさなものではなく、私の知りたい点をネットで調べ上げて書いた一つの説明資料である。何かの提案をしているわけでもないのに、論文というほどのものでもない。単なる説明資料である。

劉邦の全貌を知るには、宮城谷昌光の「劉邦」（2015年7月、毎日新聞出版）を読むのがいい。大変面白いので、是非、読んでいただきたい。しかし、宮城谷昌光の「劉邦」（2015年7月、毎日新聞出版）を読んだ上で、もっと劉邦のことを深く知りたいと思う人が出てくるかもしれない。そういう方は、私のこのホームページをじっくり見ていただきたい。宮城谷昌光の「劉邦」（2015年7月、毎日新聞出版）の補足説明資料になっているはずだ。

劉邦が旗揚げをしたあと、どんなところで初戦を戦ったのか？

劉邦が初戦を戦っていた頃、張良は劉邦に出会うのだが、その場所は？

劉邦は、自分の本拠地を出発して、どういうルートを経て関中入りをしたか？

武関（ぶかん）というところはどこか？

嶢関（ぎょうかん）というところはどこか？

関中、咸陽、西安というところはどこか？

これらの点につき、私の説明は、きっと何かの役に立つ筈である。

# 劉邦について

## 第1章 概要

沛県豊邑中陽里（現在の[江蘇省徐州市豊県](#)）で、父・[劉太公](#)と母・[劉媪](#)の三男として誕生した。長兄に劉伯、次兄に劉喜が、異母弟に劉交がいる。

劉媪が劉邦を出産する前、沢の側でうたた寝をしていると、夢の中で神に逢い、劉太公は劉媪の上に龍が乗っている姿を見た。その夢の後に劉邦が生まれたという。

劉邦は鼻が高く、立派な髭をしており、いわゆる龍顔、顔が長くて鼻が突き出ている顔をしていたという。また、太股に72の黒子があった。72とは1年360日を[五行思想](#)の5で割った数で、当時ではかなりの吉数である。

その頃の幼馴染に[盧綰](#)と[樊噲](#)がいる。特に盧綰は、盧綰の父親と劉太公が親友付き合いをしており、また盧綰が劉邦と同じ日に生まれたことから、2人も幼少時から親しくして育った。

ある時、劉邦は夫役で咸陽に行ったが、そこで始皇帝の行列を見て「ああ、大丈夫たる者、あのようにならなくてはいかんなあ」と言った。この言葉は項羽が同じく始皇帝の行列を見たときに発した「奴に取って代わってやるわ!」という言葉とよく対比され、劉邦と項羽の性格の違いを表すものとして使われる。

反秦戦争に参加する前の劉邦はいわゆる侠客であり、家業を厭い、酒色を好んだ生活をしていた。縁あって沛東に位置する泗水の亭長に就いたが、任務に忠実な官人ではなかった。沛の役人の中に後に劉邦の覇業を助けることになる[蕭何](#)と[曹參](#)もいたが、彼らもこの時期には劉邦を高くは評価していなかったようである。しかしなぜか人望のある性質であり、仕事で失敗しても周囲が擁護し、劉邦が飲み屋に入れば自然と人が集まり、店が満席になったと伝えられる。また、この任侠時代に[張耳](#)の食客になっていたともいう。

亭とは当時一定距離ごとに置かれていた宿舎のことで、亭長は、その宿駅の役場の長。治安警察・旅客管理・民事処理の任にあたった。劉邦は、そのような沛県の下っ端役人であ

ったが、反秦連合に参加した後に秦の都咸陽を陥落させ、一時は関中を支配下に入れた。その後項羽によって西方の漢中へ左遷され漢王となるも、東進して垓下に項羽を討ち、前漢を興した。

霸王となった項羽によって左遷させられた劉邦が、最終的な戦い「四面楚歌」の場面をまずご覧いただきたい。

[https://www.youtube.com/watch?v=bKcZIMuP\\_wE](https://www.youtube.com/watch?v=bKcZIMuP_wE)

では、沛県の亭長にしか過ぎなかった劉邦がどのように前漢の皇帝になるのか、その経緯を大事な場面ごとに辿ってみよう。

## 第2章 呂公歓迎の宴

史記・高祖本紀によると、呂公歓迎の宴は次のようなものであった。

あるとき、単父（咸陽の東南東、函谷関の南西にある地名）の人・呂公が仇討ちを避けて沛へとやって来た。呂公は単父で人を殺し、その仇を避けるため、仲の良かった沛の県令を頼ってきたのである。そこで、名士である呂公を歓迎する宴が開かれ、蕭何がこの宴を取り仕切った。沛の人々はそれぞれ進物に金銭を持参して集まったが、あまりに多くの人が集まったので、蕭何は進物が千銭以下の人は下座の地面に座ってもらおうと提案した。そこへ劉邦がやってきて、進物を「銭一万銭」と呂公に伝えた。あまりの金額に驚いた呂公は、慌てて門まで劉邦を迎え、上席に着かせた。蕭何は劉邦が銭など持っていないのを知っていたので、「劉邦は前から大風呂敷だが、実際に成し遂げたことは少ない（だからこのことも本気にしないでくれ）」と言ったが、呂公は劉邦を歓待し、その人相を見込んで自らの娘を娶わせた。これが呂雉である。

なお、これは宴会が終わってからの話であるが、呂公の妻・呂媪は呂公を怒ってこう言った、「あなたはいつも、この娘を貴重と考え、貴人に嫁がせたいと考えておられました。沛の県令はあなたと親しい間柄です。そのお方が、この娘を嫁に欲しいと申し出られたのに、あなたは嫁がせませんでした。それなのにどうして自分からむやみに劉季などに嫁がせようとするのですか。」

呂公は言った、

「これは女子供の知ったことではない。」・・・と。結局、娘・呂雉を劉季に嫁がせた。

ウィキペディアにもこのようなことが書かれていて、史記におけるこの「呂公歓迎の宴」の記事は一般によく知られた場面のようなものである。しかし、ネットでいろいろ調べてみても、呂公という人がどのような人物であるのかほとんどわからない。これは不思議なことである。漢という国の皇后の父親である。そのような人のことがネットでほとんどわからないということは全く不思議としか言いようがない。

また、呂公がいくら人相見に長けた人であっても、劉邦の人相を見ただけで自分の娘を嫁にやるなんてことがあり得るだろうか。初対面の席でその人物の人相を見ただけで、その人物を心底信頼して一身上の重大な決断をするなんてことが実際にあるのだろうか。私は、歴史上、そのような事例があったとは思われない。その人の人品骨柄を見て、なんと

かお近づきになりたいと思い、その後礼を尽くした人は、日本の場合だと、北条泰時と明恵の例とか大久保忠寛と勝海舟の例があるが、まずは親しくお付き合いをして、それからその人物に自分の夢を託すというのが当たり前で、初対面の席でその人物の人相を見ただけで、その人物を心底信頼して一身上の重大な決断をするなんてことが実際にはありえないことだと思う。

この二つの不思議な点から、私は、呂公について調べた学術論文がないか、ネットで探しまくって、やっとの事でそれを見つけた。それをこれから紹介したい。

劉邦の義父・呂公については、楠山修作の「呂公についての一考察」という論文がある。

<http://www.i-repository.net/contents/outemon/ir/201/201951107.pdf>

楠山修作は、『宮崎市定氏は、呂公のことを大財産家と呼び、その「財力」に物を言わせて漢朝成立に大きく貢献したことをほのめかしておられるが、その財力の由って来たところは説明しておられない。』・・・と述べ、その財力の由って来たところについて考察を行っているのだが、その結論はともかく、呂公が大財産家であったことは間違い無いと思う。

その呂公が自分の娘・呂雉を劉邦に嫁がせるなんてことは、よほど劉邦が将来性のある大人物であること見抜いていなければありえない話である。

楠山修作は、上記論文で次のように言っている。

一方、呂公の方はといえば、県令の重要な客人とされていたほどの地位の人物でありながら、劉邦のさし出した謁を見て大いに驚いたのは不可解である。さらに相を観るのを得意とすることが強調されるが、そのみで最愛の娘呂雉を劉邦に嫁がせることにするの肯げない。しかも、それは浦の県令の要求があっても承諾しなかった上、妻呂嬃の反対を押し切ったことである。

このようにみてくると、この両者の出会いは、どうも作為的で不自然であるように思われる。ということは、この両者は実はこれが初対面ではなく、これ以前に既に何らかの形で接触していたのではないかと推察されるのである。そうして、この対面に備えて、かなり突っこんだ深い話し合いをもっていたので、さてこそ、浦県内の吏が集合した機会に預め打合せていた筋書どおりの芝居気たっぷりの演技ができたのであろう。

さらに想像を逞しくすれば、呂公が浦に来た理由として仇を避けてというのも単なる口実であって、真実は、劉邦との連合を図ることにあったのではないかとさえ考えられる。

[郭沫若](#)や[佐竹靖彦](#)など中国や日本の歴史家の見解によると、呂雉は秦で繁栄した[呂不韋](#)の一族である可能性があるという見解がある。史記や漢書には記述が無いため真相は不明だが、「呂公についての一考察」という論文で楠山修作が考えるように、呂公は、もともと秦王朝を倒す野心があったのかもしれない。

なお、史記には劉邦の人相について、以下に紹介するような記事があるが、『史記』にはその他にもいくつかの「劉邦が天下を取ることが約束されていた」との話載せている。それらの逸話の中で特に、劉邦が[赤龍](#)の子であるとする逸話は、次の章で紹介するように、漢が[火徳](#)の帝朝と称することに繋がっていて、劉邦の逸話のまさにハイライトといえるが、劉邦の人相に関する逸話はその伏線として注目に値する。劉邦の人相に関する逸話は次の通りである。

妻を娶ったものの劉邦は相変わらずの侠客であり、呂雉は実家の手伝いをし、2人の子供を育てながら生活していた。ある時、呂雉が田の草取りをしていたところ、通りかかった老人が呂雉の人相がとても貴いと驚き、息子と娘の顔を見てこれも貴いと驚き、帰ってきた劉邦がこの老人に人相を見てもらうと「奥さんと子供たちの人相が貴いのは貴方がいるためである。あなたの貴さは言葉にすることができない」と言い、劉邦は大いに喜んだという。



### 第3章 雌伏の時期

劉邦が沛県・泗上の亭長に命じられてから後のこと、咸陽の陵墓建設工事の為に囚人の酈山護送が命ぜられた。ところが護送の途中で次々と脱走者が続出し、最早その任を完遂できなくなってしまった。そこで、豊邑を過ぎたところで、囚人たちを解き放ってしまった。これは職務放棄であり、沛県の知事に対する反逆である。当然、重い罰を受けることになる。劉邦はそれを覚悟の上で、囚人をすくために彼らを解き放ったのである。そんな劉邦の豪胆さに接して、囚人の血気盛んな者たちは劉邦につき従い、彼の下から離れようとはしなかった。

彼らとともに沢中の小径を進んでいった。その先行者が引き返して報告するに、「前方に大蛇がいて横たわっております。引き返しましょう」。しかし劉邦は酔って言った。「壮士が行くのに、なんの怖れることがあるか」。そして前進して、剣を抜いて蛇を切った。

後から来た者達が蛇のいたところに着くと、そこには老婆がいて、夜だというのに泣いていた。老婆曰く、「我が子は白帝の子です。蛇に化けて道に横たわっていたのですが、赤帝の子に斬られたのです」。人々がさらに問い詰めようとする、老婆はたちまち消えてしまった。この逸話は、史記にも出てくる有名な逸話である。

この後、劉邦は、「山沢巖石」に隠れ、雌伏の時期を過ごす。私が雌伏の時期というのは、この時期、劉邦は、ただひたすら「山沢巖石」に隠れ、時節の到来を待つからである。劉邦は、天命というものを信じる人であり、「山沢巖石」を出て、沛県に戻る時期は、天に任せようと考えていたのである。この時期、ただひたすら「山沢巖石」に隠れて過ごすのだが、その様子は史記には出てこない。しかし、宮城谷昌光の「劉邦」（2015年5月、毎日新聞出版）に出てくる。もちろん、その様子は宮城谷昌光の創造であり、歴史的事実ではないが、劉邦の本質的なところを突いていると思うので、以下に、逐次要点を紹介しておきたい。宮城谷昌光は、「劉邦」（2015年5月、毎日新聞出版）の中で次のようなことを書いている。すなわち、

『 劉邦に付き添った人たちのうち王吸ら三人が、来た道を豊邑に放置してきた囚人護送車の所まで引き返し、食料を取り戻してきた。引っ張ってきた車には食料が満載されていた。劉邦は、これから逃亡生活が始まるが、盗賊にはなるまいと思っている。これほど多い食料があれば、盗賊にならないで済むと、劉邦は王吸ら三人を褒め称えた。』

『 これから、劉邦たちは、住民に見つけられにくく、住みやすい場所を探しあてなければならないが、これがたいそう難しい。住むことに不可欠なのは水である。川か沢の近く

がいいが、平坦な地では隠れようがない。草の多い地に留まっても、鳥獣が少なく、狩猟で食料をおぎないにくい。そうすると、森か山の中に住むのがいいが、水との距離が難問になる。そこで劉邦たちは、天府の地を必死で探すことになる。天府の地とは、自然の宝庫のような地をいうが、劉邦は理想郷をイメージしていた。それが史記に言うところの「山沢巖石」の地であり、劉邦らはそれを見つけたのである。』

『 配下の者たちは、むしろを編み、木の枝を組み合わせて、巖穴をふさぐための戸を造った。さらに、弓矢と戈（か）を作った。大きな物といえば、見張り小屋まで造る者がいた。』

『 劉邦らと同じように、県知事の怒りをかい、逃亡せざるをえなくなって、劉邦たちの住む「山沢巖石」の地にやってきた碭県（とうけん）の人たちが何人かいて、その人たち七人が劉邦の人となりを見て、仲間に入る。その人たちから、当局の取り締まりの苛酷さを聞き、沛県の様子を探りに行くよう、劉邦は樊噲（はんかい）に命ずる。』

『 樊噲が旅を終えて、本拠にしている「山沢巖石」の地に入っていくと、まともな家を目にして驚く。王吸の説明によると、山は險塞になりつつあるという。喬木でうまく隠されているが、規模の小さな望楼が建てられていた。こういう家が山の三方に建てられ、その家に詰めた者は、昼夜、見張りを続けているという。』

『 その頃、突然、呂雉がやってくる。「劉邦の上方にいつも雲気が立ち上っているので、その雲気にしたがって、呂雉は彼を見つけることができた」というこの逸話は、史記にも出てくる有名な逸話である。』

『 この呂雉の訪問が人の知るところとなり、「泗水亭長は、泗水県と碭県の境にいるらしい。」とい噂が広まった。そして、この頃になると、沛県と豊邑の人夫が途中で脱走した実情と、その際、劉邦がとった行動も、沛県の人たちに知られて、劉邦を英雄視する者たちが現れ始めた。そして、少ない食料を持って「山沢巖石」の地にやってくる若者が出てきて、劉邦の配下は80人を超えるまでになった。食料は足りるか、心配になった樊噲は、食料を管理している王吸に問うたところ、「今年の冬は越せそうにない。」とのことであつた。』

『 そういう時期に、最初の**陳勝・呉広の乱**がおこった。「亭長は、お起（た）ちにならないのですか？」と、ある者が劉邦に問うた。劉邦はいささかもためらわず、「天に命ぜられらば起（た）つ。その声が聞こえない限り、起（た）たない。」と、答えたという。』

宮城谷昌光の「劉邦」（2015年5月、毎日新聞出版）に記載されている劉邦雌伏の時期の様子は、以上の通りであるが、この後、第4章以降は、史記にしたがって、劉邦がたどった道のりを大事な場面ごとに紹介していきたいと思う。

## 第4章 劉邦の旗揚げ

紀元前209年、この年は、秦の始皇帝がなくなる前の年であるが、この年、陳勝・呉広の乱が発生した。反乱軍の勢力が強大になると、沛の県令は反乱軍に協力するべきか否かで動揺した。このような史記の記述によると、もはや秦の威光は崩れ、沛県の軍隊は県令の意向次第で秦に対する反乱軍にもなり得たし、逆に、反乱軍に対する鎮圧軍にもなり得たようだ。そのどちらを選択するのか、沛の県令はいろいろ迷って、決断しかねていたようである。

そこに県令の部下である蕭何と曹参が「県令では誰も従わない、人気のある劉邦を押し立てて反乱に参加するべきだ」と吹き込んだ。一旦はこれを受け入れた県令であったが、劉邦の所（「山沢巖石」の地）に使者が行った後に考えを翻し、沛の門を閉じて劉邦を締め出そうとした。

劉邦は一計を案じて、絹に書いた手紙を城の中に投げ込んだ（中国の都市は基本的に城塞都市である）。その手紙には「今、この城を必死に守ったところで、諸侯（反乱軍）がいずれこの沛を攻め落とすだろう。そうなれば沛の人々にも災いが及ぶことになる。今のうちに県令を殺して頼りになる人物を長に立てるべきだ」と書いてあり、それに応えた城内の者は県令を殺して劉邦を迎え入れた。

劉邦は最初は「天下は乱れ、群雄が争っている。自分などを選べば、一敗地に塗れることになる。他の人を選ぶべきだ」と辞退した。しかし、蕭何と曹参が劉邦を県令に推薦したので、劉邦はこれを受けて県令となった。以後、劉邦は沛公と呼ばれるようになる。

この時、劉邦が集めた兵力は2、3千というところで、配下には蕭何・曹参の他に「山沢巖石」の地で逃亡生活を共にした義弟の樊噲や幼馴染の盧綰、それに県の厩舎係をやっていた夏侯嬰、機織業者の周勃などがいた。

蕭何は、劉邦と同じく沛県豊の出身で、若い頃からそこで役人をしてきた。下役人であったがその仕事ぶりは真面目で能率がよく、評価されていたという。なお曹参はこの時の部下にあたる。曹参等とともに沛県城でクーデターを起こしたそれ以降、劉邦陣営における内部事務の一切を取り仕切り、やがて劉邦が項梁、項羽を中心とした反秦陣営に加わり各地を転戦するようになると、その糧秣の差配を担当してこれを途絶させず、兵士に略奪に走るような真似をさせることがなかった。また、劉邦が秦の都咸陽を占領した時には、他

の者が宝物殿などに殺到する中、ただ一人秦の歴史書や法律、各国の人口記録などが保管されている文書殿に走り、項羽による破壊の前に全て持ち帰ることに成功した。これが漢王朝の基礎作りに役立ったと言われている。紀元前206年、秦が滅亡し、劉邦が漢王に封建されると、蕭何は丞相に任命され、内政の一切を担当することになる。

曹参は、劉邦にしたがって以降、歴戦の勇士となる。[楚漢戦争](#)後の選評での戦功第一は誰かという評において、数十箇所を負いながらも前線で戦ったことから曹参を推す声も大きかったが、結果的には後方支援で劉邦軍に絶えず兵糧・兵馬を支援し続けた蕭何が選ばれた。漢王朝を立てた高祖・劉邦は、曹夫人が産んだ庶長子・劉肥（悼恵王）を韓信から召し上げた斉国の王とし、曹参を斉国の丞相とした。当時の斉は七十余城を数える大国であり、更に最高位の臣として曹参がなったことから、功績の多さと評価の高さ、更に劉邦からの信頼の厚さが伺える。曹参が斉国の丞相の時、曹参は長老や学者を召して人民を安定させる方策を訊ねた。意見はみんなばらばらだった。蓋公という人物がおり、黄帝と老子に詳しいと聞いて、彼を招聘し、彼の意見を採用して統治を行った（[黄老思想](#)）。

夏侯嬰は、若くして劉邦を慕っていた。間もなく県の厩舎係（馬車の御者）・書記を務めた。劉邦が挙兵し反秦連合に参加して沛公となると、その功績により[太僕](#)に任命され、後に滕公に封じられる。その後、ずっと太僕として劉邦に従軍する。また、一介の下役人だった[韓信](#)の器量を見抜き、国士として推挙した一人である。[彭城の戦い](#)で敗北した際に、夏侯嬰は劉邦と劉邦が連れてきた息子の劉盈（のちの[恵帝](#)）と娘の[魯元公主](#)と共に逃げるが、追っ手に追いつかれると恐怖した劉邦は劉盈と魯元公主を馬車から突き落とす。夏侯嬰は2人を拾い上げたので、劉邦は怒って夏侯嬰を斬ろうとしたが、結局一行は揃って味方陣営へ逃げ帰ることができた。これにより、劉一門からの信任が篤くなった。その功績で[昭平侯](#)に封じられた。劉邦が項羽の西楚を滅ぼして天下統一を成すと、それまでの功績で[汝陰侯](#)に累進した。後漢末期、魏の礎を創った曹操と共に挙兵した夏侯惇・夏侯淵らは夏侯嬰の末裔という。

周勃は、劉邦が漢中から出撃する際に先陣を務めて、秦の將軍・章平らを破った。劉邦の旗揚げは、陳勝・呉広の乱をきっかけに行われるのだが、陳勝・呉広の乱という言い方では、誰が主役であるかが分からず、ことの筋道が分からなくなってしまうので、私は、陳勝の乱と呼びなおしたい。一般に陳勝・呉広の乱と言われているが、呉広は陳勝の部下であるので、あくまで反乱軍の軍権は陳勝が握っていたのである。やがて、陳勝は秦の將軍・章平に敗れて殺され、反乱軍の軍権は[項梁](#)（項羽の父の弟。すなわち項羽の叔父にあたる。自ら武信君と称した。）に引き継がれる。そしてその項梁も秦の將軍・章平によって敗死させられている。そして反乱軍の軍権は、項羽に引き継がれるのである。項羽は、この軍権を掌握することによって、持ち前の力を発揮していくのである。しかし、項羽は、陳勝の仇を討ってはいない。陳勝の仇を討ったのは劉邦である。そこが肝心のとこ

ろであって、劉邦軍は周勃のおかげで陳勝の仇を討ったことになる。その意味で、劉邦は陳勝の真の後継者と呼ぶにふさわしい。周勃の功績、実は大なるものがある。劉邦が漢王になると、周勃は武威侯となった。劉邦が死去の際「漢王朝を長らく安んずるものは必ずしや周勃であろう」と、皇后の呂雉に言い残したとされる。

後年、張良というまことに得難い人物が劉邦の軍師となるが、すでに劉邦旗揚げの時期において、劉邦軍にはすでに優秀な人物、蕭何、曹參、樊噲、盧綰、夏侯嬰、周勃などがいたのである。

## 第5章 劉邦軍初期の戦い

劉邦軍初期の戦いについては、史記に基づいて書かれたと思われる素晴らしいホームページがある。

[http://suzumoto.s217.xrea.com/blognovel/2007/07/post\\_171.htm](http://suzumoto.s217.xrea.com/blognovel/2007/07/post_171.htm)

以下においては、それにしたがって要点を書くと同時に、私自身の解釈や補足説明を加えているが、この第5章が書けたのはまさに上のホームページの作者のおかげであるので、この場を借りて厚く御礼を申し上げる次第である。

劉邦は、沛県で旗揚げをするやいなや、蕭何とその副将として夏侯嬰、それに曾参を秦軍討伐のため沛県に隣接する薛郡に派遣する。まだ小規模な軍隊しか持たない劉邦は、それが精一杯のところであたのであろう。もっと余裕があれば、他の將軍を派遣できた筈である。本拠地である沛県は劉邦自身と残る樊噲、盧綰、周勃などで固め、四方を睨みを利かせることにした。そして、生まれ故郷の豊県については、幼馴染でそれなりの軍隊を持っている雍齒にその守備を任せることにした。

薛郡で秦の郡兵を追った蕭何たちは、敵をついに胡陵で追い詰めた。もはや、秦軍の進退は窮まった。「降伏せよ。ならば、命は助けよう。」。郡兵を率いるに**監御史**の馮平に向けて、誘降の使者が送られた。馮平は、使者に向けて聞いた。「包囲の兵を率いる将の名前は、何と言うか?」。使者は、答えた。「七大夫夏侯嬰と、丞の蕭何です。」。馮平は、見知った名前を聞いた。まだ、劉邦が沛県で旗揚げをする、その以前、長く沛県は秦の支配下にあったので、馮平は元役人であった夏侯嬰と蕭何をよく知っていたのである。監御史の馮平は、「自分が目を掛けていた蕭何もまた、秦帝国に背いてしまった。地方の有為の人材が離れてしまつては、もはや秦帝国を治めることができない。」とつぶやいた。

使者が城門から出て来たとき、その傍らには監御史の馮平がいた。秦兵は、降伏した。胡陵は、沛公軍の占めるところとなった。入城した蕭何の陣営に、降伏した馮平がいた。蕭何は、馮平に言った。「秦の全国支配は、もはや崩れ去りました。戦国の世が、戻ったのです。我が主の沛公は、人材を受け入れるのに分け隔てない度量ある君主です。私が、貴方を用いるように沛公に口添えいたしましょう。」。

馮平は、蕭何に答えた。「丞のお言葉、それがしの心に温かく響きます。ですが、それがしは秦の命官。母国を裏切って沛公にお仕えすることは、できません。」。彼は、淋しく笑った。馮平は、胡陵を去ると言った。蕭何は、それを許した。

翌朝、蕭何のところに守備の兵から報告が来た。「降将の馮平が、城壁の下で死んでいるのを発見しました。城壁から飛び降りたものと、思われます。」。蕭何は、天を仰いで嘆息した。「ああ！ああ！・・・戦は、人と人とを引き離してしまう。」。

こうして蕭何たちの軍は、秦の郡兵を胡陵で破った。これより先に曹參らが、薛で郡守の兵を撃破していた。沛公軍は郡守を追ってこれを殺し、亢父にまで進んだ。方与の城市もまた、沛公軍に降るところとなった。

ところが、西から別の勢力がこの地域に手を伸ばして来た。周市が率いる、魏軍であった。**周市**が率いる、魏軍であった。

周市は、陳勝の命を受けて魏を平定した後、斉にまで兵を進めた。ところが斉ではにわかには田儼が立って王に即位し、侵入した周市の軍を蹴散らしてしまった。敗残した周市は魏に戻り、再び兵をまとめて今度は別の方向に進んでいった。従わない者は敵、という論理であった。共に秦を倒すどころか、ここでも魏は自国の都合で動き始めていた。

周市の軍は、方与に向けて進んだ。これまで沛公が戦って来た秦の郡兵とは、兵の数が何桁か違っていた。

周市は、方与を攻撃する前に、豊を守る将に向けて脅迫文を送った。

「豊は、もともと魏人が移住した邑である。魏では、すでに数十の城市が平定された。いま降れば、守将は魏の侯に取り立てられるであろう。しかし降らなければ、豊を屠る。」豊の邑を守る将は、雍齒であった。

彼は、内心では沛公の下にいることを、快く思っていなかった。雍齒は、思った。「あの劉邦でも、沛公になれたんだ。俺だって、やればできるかもしれない。」。全ての秩序が転んでしまった、今の時代であった。沛の遊び人にすぎなかった劉邦が、今や沛の王になってしまっている。自分とあいつとの間に、どれだけの差があるというのか。争乱は、まだ始まったばかりだ。まだまだ、飛び出した者勝ちの状況なのではないか？雍齒は、野望を膨らませた。「魏に転がり込んで、将となって登り詰めてやるんだ。あの劉邦が、君主になれる時代だ。俺だって、できるさ。やらなければ、男じゃないぞ。」



雍齒は、住民の前で演説を始めた。「あー、諸君。間もなく、魏軍がやって来る。このままでは、豊は皆殺しだ。」。住民から、動揺のどよめきが起った。雍齒は、続けた。

「魏は、大軍をもってこちらに進んでいる。沛公の兵では、とてもかなわん。私のところに、降伏しなければ豊を屠ると言ってきた。魏は、本気である。」。住民は、驚きと恐怖に包まれた。雍齒は、住民たちに言った。「この豊の昔を、思い出しなされよ。この邑は、もともと魏からの移民が開いたものだ。魏は、昔からこの豊を自国の版図として主張していた。今は、帰するところに帰そうではないか。魏に降れば、魏軍が我らを守ってくれるだろう。もはや、猶予はない。魏軍は、すぐそこにまで迫っている。」

住民は、驚いて城壁に登って見渡した。遠くに、兵の影が見えた。以前の郡兵などとは桁違いの、大軍であった。その上、大きな攻城用の機械まで運んでいるのが見えた。雍齒の言ったことは、本当のようであった。住民は、とうとう雍齒の言葉に従うより他はなかった。

「なにっ！ 豊が、魏軍に取られた？」。沛公は、蕭何の急な報告を聞いて、血相を変えた。「雍齒は、奴は、何をしていたんだ！」「降伏の誘いを受けて、寝返ったもようです。」「寝返り？寝返りだとお！」。沛公は、怒りを顕わにした。「お前の家の者も、いたのであろうが！ 一体何を、していたのだ！」

蕭何は、言った。「人というものは、恐怖の下に置かれると判断を誤るものです。面目ない。」「豊が取られたら、もう沛の間近じゃないかっ！ 謝って済む、話ではないわ！」

すぐさま、兵が豊に向けて進められた。だが、すでに豊の邑には魏軍が入り込んでいた。豊の邑の住民は、戦争の現実をよく理解できていなかった。目先の身の安全を守れば、やがて何とかなると思っていた。だが開城の知らせを受けるや否や、魏軍は直ちに大部隊を派遣して、豊の邑を完全に占領した。

沛と豊の間には、魏の兵が展開していた。

「ちいつ、前の郡兵よりも、大軍だ。」。沛公は、敵軍の威容を見て、うなった。こちらの軍の、士気は高い。目の前の魏兵と戦っても、負けるとは限らなかった。だが、力攻めすれば邑はおそらく壊滅するであろう。

蕭何は、沛公に言った。「力攻めは、豊の邑を亡ぼすでしょう。」。沛公は、怒って言っ

た。「亡ぼしても、構わんわ!」。蕭何は、言下に否定した。「できるだけ戦わずに開城させる策を、考えるべきです。今の我らでは、魏と渡り合うだけの力がありません。別の勢力と、合流するべきです。ここで郷里を見捨てては、沛公の名声が傷つくだけです。」。

魏軍の狙いは、この沛県じたいを丸ごと飲み込むことに、相異なかった。一県の勢力では、一国の勢力と対等に戦うことはできない。沛公は、頭に血を昇らせて、罵った。

「おのれ、雍齒め、捕まえたら、八つ裂きにしてくれるわ!」。彼は齒ぎしりしたが、今は蕭何の言葉に従うより他はなかった。

沛公軍は、沛に撤退した。

ちょうどその頃は、まさに混乱期で、楚の体制もまだ不安定で、**変な王**が擁立されていた。私が変な王というのは、「景駒」のことである。

私は、すでに第4章で少し触れておいた。**劉邦の旗揚げは、陳勝の乱をきっかけにして行われるのだが、やがて、陳勝は秦の将軍・章平に敗れて殺され、反乱軍の軍権は項梁（項羽の父の弟。すなわち項羽の叔父にあたる。自ら武信君と称した。）に引き継がれる。ところが元陳勝の部下であった秦嘉が項梁とは相談せずに、勝手に、楚の国王に「景駒」を擁立するのである。楚の軍隊の実権は項梁が握っていたのであって、すぐに秦嘉は項梁によって殺され、景駒が排斥されるであろうことは、項梁の実力を知っている者であれば、当然わかりきったことであった。しかし、秦嘉は、項梁の実力を甘く見たのか、国王という者の権威を過信しすぎたのかもしれないが、楚の国王・景駒を押し立てて、楚の実権を握ろうとしていたのである。秦嘉に同調する人物に寧君という人がいる。寧君という人は、心底、秦王朝を倒すことを考え続けていた人で、景駒を押し立てて秦王朝を打倒したいと考えていたようだ。この人の経歴は、皆目わからないが、劉邦を盛り立てることに熱心であったようだ。**

**劉邦は豊を落とすためにもっと兵力が必要だと考えて、景駒に兵を借りに行った。景駒は快くこれに応じる。というより、寧君が快く応じたのかもしれない。沛公は、景駒の傘下に入ることに決めた。**

**だが、魏と争う前に、もっと強い兵が近づいて来た。章邯が指揮する、秦軍であった。**

章邯は陳勝の別將司馬尼（しばい）を降し、相（しょう）の城市を屠って碭（とう）を襲った。疾風のように軍を大平原で旋回させながら、向かう先の敵を次々に葬っていった。

楚王の配下となった沛公は、東陽の寧君（ねいくん）という者と共に、秦軍を迎え撃つために西進した。沛公軍はここで素晴らしい実力を発揮した。周勃は、常に兵を率いて先陣に立った。曹参と樊噲は、敵に降った司馬尼の兵を斥け、多くの首級を得た。夏侯嬰は、常に沛公と共にあり、馬車を操り戦場を駆け回った。

沛公軍は碭を占領して、兵五、六千人を得た。さらに下邑から虞に至るまでの土地を攻め、曹参が章邯軍の車騎を撃った。下邑もまた降り、曹参は兵を亢父のあたりにまで進めた。戦いが終わったとき、曹参、周勃、夏侯嬰は、五大夫に昇進していた。樊噲は、国大夫となった。

この増強された兵を持って、改めて豊に陣を敷いて魏と対峙した。

章邯は、陳勝を倒したにも関わらず楚軍がいまだに強いことを理解した。その手応えは、残党どころではない。楚は、まだ死んでいなかった。章邯は、今後の戦略を変えた。楚は、自分の指揮する部隊だけでは、まだ亡ぼすことができない。先に楚以外の国を、引っこ抜くべきだ。章邯は、標的を魏に絞った。

秦軍は、魏を討つために全軍の方向を転換した。

こうして、魏は絶体絶命に追い込まれようとしていた。しかし、沛公にとっては魏の窮地は目先の利益だけから言えば、都合のよいものであった。しかしながら、豊を取り返すことは、またもや後回しとならざるを得なかった。自らが頼る楚王の命運が、怪しくなり始めたからであった。

項梁の江東軍が、下邳にまで迫ってきた。下邳に向けて進む項梁軍は、城市を接収するために先遣隊を送り込んだ。その部隊の中の一人が、城市の城壁や通りのことを、懐かしく思い出していた。韓信である。

彼は現在軍吏の一人として働いていたが、同輩たちが下邳を取り仕切る実力者のことについて噂するのを、横で聞いていた。「下邳を取り仕切っているのは、張良子房だ。あの博浪沙で、始皇帝を襲った男だ。彼が生きていたというのだから、驚きであるよ。」。城市の奥にある張良の邸宅は、以前のままだに残っていた。韓信が張良に会うのは久しぶりだ。張良は語る。「景駒・秦嘉ごときは潰えるべきですが、その配下の沛公軍は、強

い。江東軍と沛公軍とが衝突すれば、両者ともに無傷では済まないでしょう。二頭の牛が争えば、背後にいる黒熊が隙を突いて襲い掛かり、両者は肉塊となるのです。項梁と沛公が争うことは、何としても避けなければなりません。」。張良は、これから沛公のところに赴いて、彼に楚の大道に就くべきことを説くつもりであった。張良は、言った。

「沛公の軍は、これまでの戦でその精強さを示しました。その上、彼は蕭何という良い政治家も従えているようです。しかし彼のそばには、戦略を立てる者がいない。沛県の向こうにある世界を見通すべき者が、いないのです。それは、彼にとって惜しい。沛公は、もっと大きくなるべき存在なのです。」。

張良は、配下の一同を連れて、下邳を離れた。表向きは、楚王景駒に投じると称していた。しかし、張良は真っ直ぐに沛公のもとに赴いた。

「下邳の、張良？ 博浪沙の、張子房か！」博浪沙の張良の名前は、沛公もまたよく知っているところであった。彼が楚に潜伏しているという情報は、彼も以前から聞いていた。しかし、これまで二人は出会う機会を逸していた。その二人は、ついに会見することとなった。

「張良子房で、ございます。沛公には、始めてお目にかかります。」。沛公は、張良の君子然とした涼やかな表情に、嘆息の声を漏らした。「ほう、俺は、博浪沙の男のことを、もっと化け物のような勇士だと思っていたが、れは、驚いたよ。全く、女性のようにはないか。」。沛公は、人物に対して正直な印象を述べる男であった。これによって人を怒らせることもあるが、それも彼の持ち味のうちであった。彼は張良に女性のように言ったが、別に侮りの気持ちを含めているわけではなかった。しかし、張良にとってははずいぶん失礼な言葉であった。張良は、今は彼の批評などを受け流した。

彼は、沛公に言った。「それがし、いささか学んだ兵法をもって、沛公のためにお役に立てようと思ひ馳せ参じました。今は、公にとって乗るか反るかの大事な時です。どうか、それがしを陣営にお留めください。」張良は、美顔を沛公に向けて上げた。沛公は、言った。「見事だ。張子房、まさに、見事な男だ。」沛公は、喜んでいて、まるで、美女を見ているかのような、表情のほころびであった。

こうして張良は、沛公の陣営に留まることとなった。

紀元前208年、劉邦は甯君と共に秦軍と戦うが、敗れて引き上げ、新たに碭（とう。現在の安徽省碭山）を攻めてこれを落とし、ここにいた5、6千の兵を合わせ、さらに下邳

([河南省鹿邑](#))を落とし、この兵力を持って再び豊を攻めて、やっとの思いで豊を陥落させた。雍齒はその時[趙](#)にいた[武臣](#)(武信君すなわち項梁。項羽の叔父。)を頼って趙に逃れた。

この第5章をざっと目を通して頂いた後、項羽の都・徐州と劉邦の本拠地・沛県と豊県、それに劉邦軍初期の戦いの地・薛城と胡陵城やその頃張良が劉邦と出会った邳州などについては、次のホームページをじっくりご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/kouunomiyako.pdf>

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/tyouyukari.pdf>

## 第6章 劉邦の関中入り

第5章で、景駒のことを変な王と述べ、その意味するところを述べた。劉邦の旗揚げは、陳勝の乱をきっかけにして行われるのだが、やがて、陳勝は秦の將軍・章平に敗れて殺され、反乱軍の軍権は項梁（項羽の父の弟。すなわち項羽の叔父にあたる。自ら武信君と称した。）に引き継がれる。ところが元陳勝の部下であった秦嘉が項梁とは相談せずに、勝手に、楚の国王に「景駒」を擁立するのである。楚の軍隊の実権は項梁が握っていたのであって、すぐに秦嘉は項梁によって殺され、景駒が排斥されるであろうことは、項梁の実力を知っている者であれば、当然わかりきったことであった。

案の定、景駒は項梁によって殺され、項梁が新たな反秦軍の頭領となって、旧楚の懷王の孫を連れてきて楚王の位に即け、祖父と同じく懷王と呼ばせた（後に項羽より義帝の称号を送られる）。劉邦は、項梁の勢力下に入り、項梁の甥である項羽と共に秦軍と戦う。

項梁は何度となく秦軍を破ったが、それと共に傲慢に傾いて秦軍を侮るようになり、章邯軍の前に戦死した。劉邦たちは遠征先から軍を戻し、新たに反秦軍の根拠地に定められた彭城（現在の江蘇省徐州市）へと集結した。項梁を殺した章邯は軍を北へ転じて趙を攻め、趙王の居城鉅鹿を包囲したため、趙は楚へ救援を求めてきていた。そこで懷王は項梁から楚軍の軍権を引き継いだ項羽を將軍として主力軍を派遣し、趙にいる秦軍を破った後、咸陽へと攻め込ませようとし、その一方で劉邦を別働隊として西回りに咸陽を衝かせようとした。そして懷王は「一番先に関中（咸陽を中心とした一帯）に入った者をその地の王とするだろう」と約束した。

趙へ向かった項羽は、渡河した後に船を全て沈めて3日分の兵糧を配ると残りの物資を破棄し、退路を断って兵士たちを死に物狂いで戦わせるという凄まじい戦術で秦軍を撃破、一気にその勇名を高めた。しかしその後、咸陽へ進軍する途中で秦の捕虜20万を生き埋めにするという、これも凄まじい虐殺を行う。このことは後の楚漢戦争でも項羽の悪評として人々の心に残り、多大な影響をもたらすことになる。項羽は、人心を掌握するという点で劉邦とは真逆の人であったのである。劉邦は寛大さによって人心を掌握したのに対して、項羽は厳格すぎると思われるような規律によって人心を掌握したのである。

劉邦は西に別働隊を率いて行ったが、その軍勢は項羽軍に比べて質・量ともに劣っており、道々苦戦しながら高陽（河南省杞県）まで来た。ここで劉邦は儒者の酈食其の訪問を受ける。劉邦は、大の儒者嫌いで、酈食其に対しても、足を投げ出してその足を女たちに洗わせながら面会するという態度であった。しかしこれを酈食其（れきいき）が一喝する

と、劉邦は無礼を詫びて酈食其（れきいき）の進言を聞いた。酈食其（れきいき）は「近くの陳留は交通の要所で食料が蓄えられているのでこれを得るべきである。城主は反秦軍を脅威に思っているのので、降っても身分を保証すると約束して頂ければ、帰順させるよう説得する」と言った。劉邦はこれを採用し、陳留の県令は説得に応じて降り、交通の要所と大量の兵糧を無血で手に入れた。さらに劉邦はその兵力を合わせて進軍し、開封を攻め落とした。次いで韓に寄り、寡兵で苦戦していた韓王成と張良を救援して、秦の名将・楊熊率いる秦軍を駆逐し、韓を再建した。そしてその恩義をもって、張良を客将として借り受ける。

張良は、韓の人である。韓は、強国楚と秦に挟まれ、紀元前230年に秦によって滅ぼされた。張家は韓の王族で元々姫姓を名乗っており、代々宰相の位につき、歴代韓王を補佐した。張良の祖父張開地は昭侯・宣惠王・襄哀王の三代に仕え、父張平は釐王・桓惠王に仕えた。張平は、まだ幼い張良を残して桓惠王23年（BC250）に死んだ。その20年後、韓は滅びた。

祖国を滅ぼされた張良は復讐を誓い、全財産を売り払って復讐の資金とした。弟が死んでも、費用を惜しんで葬式を出さなかったという。張良は同志を求めて東へ旅をし、倉海君という人物に出会い、その人物と話し合っって屈強な力士を借り受け、秦の始皇帝が巡幸の途中で博浪沙（現在の河南省陽武の南）を通った所を狙った。方法は重さ120斤（約30kg）という鉄槌を投げつけ、始皇帝が乗った車を潰すというものであった。しかし鉄槌は副車に当たってしまって暗殺は失敗に終わり、張良たちは逃亡した。始皇帝は自らを暗殺しようとした者に怒り、全国に触れを回して捕らえようとした。そこで張良は偽名を使って下邳（現在の江蘇省徐州の東の邳州市）に隠れた。

ある日、張良が橋の袂を通りかかると、汚い服を着た老人が自分の靴を橋の下に放り投げ、張良に向かって「小僧、取って来い」と言いつけた。張良は頭に来て殴りつけようかと思ったが、相手が老人なので我慢して靴を取って来た。すると老人は足を突き出して「履かせろ」と言う。張良は「この爺さんに最後まで付き合おう」と考え、跪いて老人に靴を履かせた。老人は笑って去って行ったが、その後で戻ってきて「お前に教えることがある。5日後の朝にここに来い」と言った。

5日後の朝、日が出てから張良が約束の場所に行くと、既に老人が来ていた。老人は「目上の人間と約束して遅れてくるとは何事だ」と言い「また5日後に来い」と言い残して去った。5日後、張良は日の出の前に家を出たが、既に老人は来ていた。老人は再び「5日後に来い」と言い残して去って行った。次の5日後、張良は夜中から約束の場所で待った。しばらくして老人がやって来た。老人は満足気に「おう、わしより先に来たのう。こうでなくてはならん。その謙虚さこそが大切なのだ」と言い、張良に太公望の兵法書を渡

して「これを読めば王者の師となれる。13年後にお前は山の麓で黄色い石を見るだろう。それがわしである」と言い残して消え去ったという。

後年、張良はこの予言通り黄石に出会い、これを持ち帰って家宝とし、張良の死後には一緒に墓に入れられたという。

この「[黄石公](#)」との話は伝説であろうが、張良が誰か師匠に就いて兵法を学んだということは考えられる。また、太公望の兵法書というものを『[六韜](#)』だと考える向きもあるが、現存する『六韜』の成立年代は魏と晋の時代と考えられているので、少なくとも張良が読んだ書物は、現存する『六韜』ではないと見られる。

[陳勝・呉広の乱](#)が起こると、張良も兵を集めて参加しようとしたが、100人ほどしか集まらなかった。その頃、陳勝の死後に楚王に擁立された楚の旧王族の景駒が留にいたので、参加しようとした途中、下邳で劉邦に出会い、これに合流したのである。

張良は自らの将としての不足を自覚しており、それまでも何度か大将たちに出会っては自らの兵法を説き、自分を用いるように希望していたが、聞く耳を持つ者はいなかった。しかし劉邦は張良の言うことを素直に聞き容れ、その策を常に採用し、実戦で使ってみた。これに張良は「沛公（劉邦）はまことに天授の英傑だ」と思わず感動したという。

劉邦はその後、景駒を敗走させた項梁の下に入って一方の軍を任されるようになる。項梁は新しい旗頭として懐王（後の[義帝](#)）を立てた。そこで張良は韓の公子であった横陽君の[韓成](#)を韓王に立てるように項梁に進言した。項梁もこれを認めて成を韓王とし、張良をその申徒（『史記集解』に拠れば[司徒](#)のこと）に任命した。

その後、韓王成に従い、千人ほどの手勢を引き連れて旧韓の城を攻めて占領するが、すぐに兵力に勝る秦によって奪い返された。正面から当たる不利を悟った張良は遊撃戦に出た。そこに劉邦が兵を引き連れてやって来たので、これに合流し、旧韓の城を十数城攻め取り、韓を再興した。

その後、張良は主君の韓王成を城の一つに留めると、自らは劉邦に従って秦へ攻め上り、秦の東南の関である[武関](#)に至った。劉邦はすぐに攻めかかろうとしたが、張良は守将が商人出身であることに目をつけ、買収して関を開かせ、相手が油断したところで襲撃して守将を殺し、最小の被害で関中に入った。

さらに[南陽郡](#)を攻略し、郡守の[呂齮](#)を撃破して、呂齮が宛（[河南省南陽市](#)）に逃げ込んだために張良の助言でこれを包囲した。呂齮の舎人である陳恢の説得に応じて、これを降伏



させると、秦の領域へ近づいていった。この侵攻の際、劉邦は陳留のように降伏を認め、降伏した場合は城主をそのままの地位に任命したため、無駄な戦闘はしておらず、その進軍は項羽よりも早かった。そしていよいよ、関中の南の関門である**武関**に迫った。

この頃、趙で項羽が秦軍の主力を撃破し、秦の内部では動揺が走った。始皇帝の死後、**二世皇帝**を傀儡として**趙高**が専権をふるっていたが、この敗戦がばれれば自分が責任を取られると考え、二世皇帝を殺し、紀元前207年になってから劉邦に対して関中を二分して王になろうという密書を送ってきた。劉邦はこれを偽者だと思い、自らの軍をもって武関の守将を張良の策によってだまし討ちにし、これを突破した。この後、趙高は王に建てようとしていた**子嬰**におびき出されて逆に殺された。

**嶢関**は、秦の最後の砦のため決死の兵が守っていたが、守将が商人出身であり計算高いことを利用した張良の策により、大量の旗を重ねて大軍のように見せかけておいて、降るように誘った。この策は成功し、守将は降ることを約束したが、張良は兵達は決死なので降ることはないと察しており、あくまで油断させるためのものだった。劉邦の軍は砦に入るや否や、守備隊の不意をついて攻めかかって制圧し、嶢関を突破した。こうして劉邦軍は関中に入る。もはや阻むものはなく、秦都・咸陽は目前となった。

秦王**子嬰**は、覇上にまで迫っていた劉邦のところへ白装束で首に紐をかけた姿で現れ、皇帝の証である**玉璽**などを差し出して降伏した。部下の間には子嬰を殺してしまうべきだという声が高かったが、劉邦はこれを許した。

**咸陽**に入城した劉邦は宮殿の中の女と財宝に目がくらみ、ここに留まって楽しみたいと思ったが、樊噲と張良に諫められ、覇上へ引き上げた。田舎の遊び人だった劉邦にとって、咸陽の財宝と後宮の女達は極楽にさえ思われただろうが、部下に諫められると一切手を出さなかった。こうした諫言を聞き入れる劉邦の度量と配下への信頼は、項羽と対照的であり、その後の天下統一にも非常に大きな作用をもたらすことになる。ちなみにこの時、蕭何は秦の文書殿に入って法令などの書物を全て持ち帰っている。これがその後の漢王朝の法の制定などに役立ったと言われている。

**覇上**に引き上げた劉邦は、この地に関中の父老（村落のまとめ役）を集めて「法三章」を宣言する。これは秦の万般仔細に及ぶ上に苛烈な法律（故に役人が気分次第で罰を与えたりもでき、特に政道批判の罪による処罰はいいがかりとしても多用された）を「人を殺せば死刑。人を傷つけたものは処罰。人の物を盗んだものは処罰」の3条のみに改めたものである。この施策によって関中における劉邦の人気は一気に高まり、劉邦が王にならなか

ったらどうしようと話し合うほどになった。後世、「法三章」は簡便な法律を表す法諺となっている。

その頃、東から項羽が関中に向かって進撃してきていた。劉邦はある人の「あなたが先に関中に入ったにもかかわらず、項羽が関中に入ればその功績を横取りする。関を閉じて入れさせなければあなたが関中の王のままだ」というを進言を聞いて、関中を守ろうとして関中の東の関門である函谷関に兵士を派遣して守らせていた。劉邦が関中入りできた最大の要因は秦の主力軍を項羽が引き受けたことにあり、それなのに劉邦は既に関中王になったつもりで函谷関を閉ざしていることに激怒した項羽は、英布に命じてこれを破らせた。項羽は関中に入り、先の激怒と軍師・范増の進言もあって、40万の軍で攻めて劉邦を滅ぼしてしまおうとした。劉邦の部下である曹無傷は、これに乗じて項羽に取り入ろうと「沛公は関中の王位を狙い、秦王子嬰を宰相として関中の宝を独り占めにしようとしています」と讒言したので、項羽はますます激怒した。

項羽軍は劉邦軍より兵力も勇猛さも圧倒的に上であり、劉邦はこの危機を打開しようと焦っていたが、ちょうどその時、項羽の叔父である項伯が劉邦軍の陣中に来ていた。項伯はかつて張良に恩を受けており、その恩を返すべく危機的状況にある劉邦軍から張良を救い出そうとしたのである。しかし張良は劉邦を見捨てて一人で生き延びることを断り、項伯を劉邦に引き合わせて何とか項羽に弁明させて欲しいと頼み込んだ。項伯の仲介が功を奏し、劉邦と項羽は弁明のための会合を持つ。この会合で劉邦は何度となく命の危険があったが、張良や樊噲の働きにより虎口を脱した。項羽は劉邦を討つ気が失せ、また弁明を受け入れたことで討つ名目も失った。これが鴻門の会である。陣中に戻った劉邦は、まず裏切者の曹無傷を処刑してその首を陣門に晒した。

では、この第6章を終わるに当たって、「劉邦の関中入り」に関連して、重要な場面となった都市について説明するホームページを作ったので、それを是非ご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/ryuutosi.pdf>

## 第7章 彭城の戦い

その後、項羽は咸陽に入り、降伏した子嬰ら秦王一族や官吏4千人を皆殺しにし、宝物を持ち帰り、華麗な宮殿を焼き払い、さらに始皇帝の墓を暴いて宝物を持ち出している。劉邦の寛大さと対照的なこれらの行いは、特に関中の人民から嫌悪され、人心が項羽から離れて劉邦に集まる一因となっている。

項羽は彭城に戻って「西楚の霸王」を名乗り、名目上の王である懐王を義帝と祭り上げて辺境に流し、その途上でこれを殺した。紀元前206年、項羽は諸侯に対して封建（領地分配）を行う。しかしこの封建は非常に不公平なもので、その基準は功績ではなく、項羽との関係が良いか悪いかによって多くの不満を買い、すぐ後に次々と反乱が起きるようになる。劉邦にも約束の関中の地（咸陽周辺）ではなく、奥地・辺境である漢中および巴蜀が与えられた（当時「関中」には統一以前の秦の領土を指す意味もあったとされ、論功でだまし討ちにされる形にされた）。このとき劉邦を「左に遷す」と言ったことから、これが左遷の語源になったと言われている。さらに劉邦の東進を阻止するために、関中は章邯ら旧秦軍の将軍3人に分割して与えられた。

当時の漢中は、流刑地とされるほどの非常な辺境であった。そこへ行くには「蜀道の険」と呼ばれる、人一人がやっと通れるような栈道があるだけで、劉邦が連れていた3万の兵士は途中で多くが逃げ出し、残った兵士も東に帰りたく望んでいた。

「鴻門の会」の後、項羽は咸陽に入り、降伏した子嬰ら秦王一族や官吏4千人を皆殺しにし、宝物を持ち帰り、華麗な宮殿を焼き払い、さらに始皇帝の墓を暴いて宝物を持ち出している。劉邦の寛大さと対照的なこれらの行いは、特に関中の人民から嫌悪され、人心が項羽から離れて劉邦に集まる一因となっている。

その後、項羽は彭城に戻って「西楚の霸王」を名乗り、名目上の王である懐王を義帝と祭り上げて辺境に流し、その途上でこれを殺した。その後、項羽は諸侯に対して封建（領地分配）を行う。しかしこの封建は非常に不公平なもので、その基準は功績ではなく、項羽との関係が良いか悪いかによって多くの不満を買い、すぐ後に次々と反乱が起きるようになる。

この時期に劉邦陣営に新たに加わったのが韓信である。韓信は元は項羽軍にいたが、その才能がまったく用いられず、劉邦軍へと鞍替えしてきたのである。最初は単なる兵卒や下級将校であったが、やがて韓信の才能を見抜いた蕭何の推挙により、大將軍となった。その際に韓信は、「項羽は強いがその強さは脆いものであり、特に処遇の不満が蔓延しているため東進の機会は必ず来る。劉邦は項羽の逆を行えば人心を掌握できる」と説いた。また、「関中の三王は20万の兵士を犠牲にした秦の元將軍であり、人心は付いておらず関中は簡単に落ちる。劉邦の兵士たちは東に帰りたがっており、この帰郷の気持ちをうまく使えば強大な力になる」と説いた。劉邦はこの進言を全面的に用いた。

そして韓信の予言通り、項羽に対する反乱が続発し、項羽はその鎮圧のため常勝ながら東奔西走せざるを得なくなる。齊の王族・田榮が項羽に対して挙兵すると、これをきっかけに封建に不満を抱く諸侯が続々と反乱を起こした。紀元前206年のことである。項羽は討伐軍を率いて各地を転戦する。項羽は戦闘には圧倒的に強く、項羽が行けばすぐに反乱は収まるものの、間を置かず別の地域で反乱が置き、項羽がその鎮圧に行けばすぐにまた別の地域で反乱が再発するといういたちごっこを繰り返した。また項羽が降伏を許さず、反乱を起こした国の兵士は全員生き埋めにして殺し、住民も情け容赦なく殺すため、反乱軍は兵民一丸となって必死に抵抗し、戦闘は泥沼化していったのである。

項羽は劉邦にも疑いの目を向けたが、劉邦は張良の策によって栈道を焼き払って漢中を出る意志がないと示し、更に項羽に対して従順な文面の手紙を出して反抗する気がないように見せかけていた。これで項羽は安心し、反乱を起こしていた齊の田榮を討伐に向かった。

それを見た劉邦は、栈道以前に使われていた旧道を通して関中に出撃し、一気に章邯らを破って関中を手に入れ、ここに社稷を建てた。

一方、遠征先の齊でも、項羽は相変わらず城を落とすたびにその住民を皆殺しにする蛮行を繰り返したため、齊の人々は頑強に抵抗した。このため項羽は齊攻略にかかりきりになり、その隙に乗じた劉邦はさらに東へと軍を進め、途中の王たちを恭順・征服しながら項羽の本拠地・彭城を目指すこととした。

義帝の殺害を知った「漢王」劉邦は大義名分を得て蜂起し、諸侯へ項羽への反乱を呼びかける。このときの諸侯に向けた檄文は以下のものである。

「天下共立義帝，北面事之。今項羽放殺義帝於江南，大逆無道。寡人親為發喪，諸侯皆縞素。悉發關内兵，收三河土，南浮江漢以下，願從諸侯王擊楚之殺義帝者。」

劉邦の呼びかけに応じて、続々と劉邦軍に合流する諸侯が増え、連合軍は遂に50万を超える大連合軍となった。田榮の反乱から1年後のことである。劉邦は味方する諸侯との56万と号する連合軍を引き連れて彭城へ入城する。しかし、入城した漢軍は勝利に浮かれてしまい、日夜城内で宴会を開き、女を追いかけ回すという有様となった。

一方、彭城の陥落を聞いた項羽は自軍から3万の精鋭を選んで急いで引き返し、油断しきっていた漢軍を散々に打ち破った。この時の漢軍の死者は10万に上るとされ、川が死体のためにせき止められたという（[彭城の戦い](#)）。劉邦は慌てて脱出したが、劉太公と呂雉が楚軍の捕虜となってしまった。この大敗で、それまで劉邦に味方していた諸侯は一斉に楚になびいた。

命からがら逃亡する劉邦は、息子の劉盈（[恵帝](#)）と娘（[魯元公主](#)）と一緒に馬車に乗り、[夏侯嬰](#)が御者となって楚軍から必死に逃げていた。途中で追いつかれそうになったので、劉邦は車を軽くするために2人の子供を突き落とした。劉邦は、自分の子供を死なせても、自分が生き残り、万民のために尽くすことが天命だと考えていたのだろう。あわてて夏侯嬰が2人を拾ってきたが劉邦はその後も落とし続け、そのたびに夏侯嬰が拾ってきたという逸話が残っている。

## 第8章 垓下の戦い

劉邦は傷で兵を集めて一息ついたものの、ここで項羽に攻められれば防ぎきれないことは明らかだったので、[随何](#)に命じて[英布](#)を味方に引き込もうと画策し、これに成功した。しかし英布は楚の武将・[龍且](#)と戦って破れ、劉邦の元へと落ち延びてきた。劉邦は道々兵を集めながら軍を滎陽（[河南省滎陽](#)）に集め、周囲に甬道（壁に囲まれた道）を築いて食料を運び込ませ、籠城の用意を整えた。この時期、劉邦の幕僚に謀略家・[陳平](#)が加わっている。

その一方、別働隊に韓信を派遣し、魏・趙を攻めさせて項羽を背後から牽制しようとした。また元盗賊の[彭越](#)を使い、項羽軍の背後を襲わせた。

紀元前204年、楚軍の攻撃は激しく、甬道も破壊されて漢軍の食料は日に日に窮乏してきた。ここで陳平は項羽軍に離間の計を仕掛け、項羽とその部下の[范増](#)・[鍾離昧](#)との間を裂くことに成功する。范増は軍を引退して故郷に帰る途中、怒りの余り、背中にできものを生じて死亡した。

離間の計は成功したものの、漢の食糧不足は明らかであり、劉邦の影武者に仕立てた將軍の[紀信](#)を項羽に降伏させ、その隙を狙って劉邦本人は西へ脱出した。その後、滎陽は[御史大夫](#)の[周苛](#)が守り、しばらく持ちこたえたものの、項羽によって落とされた。

西へ逃れた劉邦は関中にいる蕭何の元へ戻り、蕭何が用意した兵士を連れて滎陽を救援しようとした。しかし[袁生](#)が、真正面から戦ってもこれまでと同じことになる、南の武関から出陣して項羽をおびき寄せる方がいいと進言した。劉邦はこれに従って南の宛に入り、思惑通り項羽はそちらへ向かった。そこで項羽の後ろで彭越を策動させると、こらえ性のない項羽は再び軍を引き返して彭越を攻め、その間に、劉邦も引き返してくる項羽とともに戦いたくないので、北に移動して成皋（[河南省汜水](#)）へと入った。項羽は戻ってきてこの城を囲み、劉邦は支えきれずに退却した。

夏侯嬰のみを供として敗走していた劉邦は、韓信軍が駐屯していた修武（[河南省獲嘉](#)）へ行って、韓信が陣中で寝ているところに入り込み、韓信の軍隊を取り上げた。さらに劉邦は韓信に対して斉を攻めることを命じ、曹參と[灌嬰](#)を韓信の指揮下とした。また[盧綰](#)と従兄弟の[劉賈](#)を項羽の本拠地である楚へ派遣し、後方攪乱を行わせた。

韓信はその軍事的才能を遺憾なく発揮し、斉をあっさりと下し、楚から来た20万の軍勢と龍且をも討ち破った。ただ斉を攻める際に手違いがあり、斉に漢との同盟を説きに行った酈食其が殺されるということが起きている。

紀元前203年、劉邦は項羽と対陣して堅く守る作戦をとっていたが、一方で項羽の後ろで彭越を活動させ、楚軍の兵站を攻撃させていた。項羽は部下の曹咎に「15日で帰るから手出しをしないで守れ」と言い残して出陣し、彭越を追い散らしたが、曹咎は漢軍の挑発に耐えかねて出陣し、大敗していた。漢軍は項羽が帰ってくると再び防御に徹し、項羽が戦おうと挑んでもこれに応じなかった。

その頃、韓信は斉を完全に制圧し、劉邦に対して鎮撫のため仮の斉王になりたいとの使者を送ってきた。これを聞いた劉邦は怒って声を荒げそうになったが、それを察知した張良と陳平に足を踏んで諫められ、もし韓信が離反してしまえば取り返しがつかないことを悟り、韓信を正式な斉王に封じた。

漢楚両軍は長い間対峙を続け、しびれを切らした項羽は捕虜になっていた劉太公を引き出して大きな釜に湯を沸かし「父親を煮殺されたくなければ降伏しろ」と迫ったが、劉邦はかつて項羽と義兄弟の契りを結んでいたことを持ち出して「お前にとっても父親になるはずだから殺したら煮汁をくれ」とやり返した。次に項羽は「二人で一騎討ちをして決着をつけよう」と言ったが、劉邦は笑ってこれを受けなかった。そこで項羽は弩の上手い者を伏兵にして劉邦を狙撃させ、矢の1本が胸に命中した劉邦は大怪我をした。これを味方が知れば全軍が崩壊する危険があると考え、劉邦はとっさに足をさすり、「奴め、俺の指に当ておった」と言った。その後劉邦は重傷のため床に伏せたが、張良は劉邦を無理に立たせて軍中を回らせ、兵士の動揺を収めた。

一方、彭越の後方攪乱によって楚軍の食料は少なくなっていた。もはや漢も楚も疲れ果て、天下を半分に分けることを決めて講和した。この時、劉太公と呂雉は劉邦の下に戻ってきている。

項羽は東へ引き上げ、劉邦も西へ引き上げようとしていたが、張良と陳平は退却する項羽の軍を攻めるよう進言した。もしここで両軍が引き上げれば楚軍は再び勢いを取り戻し、漢軍はもはやこれに対抗できないだろうというのである。劉邦はこれを容れて、項羽軍の後方を襲った。

劉邦は同時に、韓信と彭越に対しても兵士を連れて項羽攻撃に参加するように要請したが、どちらも来なかった。劉邦が恩賞の約束をしなかったからである。張良にそれを指摘された劉邦は思い切って韓信と彭越に大きな領地の約束をし、韓信軍と彭越軍を加えた劉邦軍は一気に膨張した。項羽に対して有利な立場に立ったことで、その他の諸侯の軍も雪崩をうって劉邦に味方し、ついに項羽を垓下に追い詰めた。

追い詰めはしたものの、やはり項羽と楚兵は勇猛であり、漢軍は連日大きな犠牲を出した。このため張良と韓信は無理に攻めず包囲しての兵糧攻めを行い、楚軍を崩壊させた。項羽は残った少数の兵を伴い包囲網を突破したが、楚へ逃亡することを潔しとせず、途中で漢の大軍と戦って自害した（[垓下の戦い](#)）。

遂に項羽を倒した劉邦は、いまだ抵抗していた魯を下し、残党たちの心を静めるために項羽を厚く弔った。

[紀元前202年](#)、劉邦は群臣の薦めを受けて、ついに[皇帝](#)に即位した。

論功行賞をした際、戦場の功のある[曹參](#)を第一に推す声が多かったが、劉邦はそれを退けて[蕭何](#)を第一とした。常に敗れ続けた劉邦は、蕭何が常に用意してくれた兵員と物資がなければとっくの昔に滅び去っていたことを知っていたのである。また[韓信](#)を楚王に、[彭越](#)を梁王に封じた。張良にも3万戸の領地を与えようとしたが、張良はこれを断った。また、劉邦を裏切って[魏咎](#)に就くなど、挙兵時から邪魔をし続けながら、最後はまたぬけぬけと漢中陣営に加わり、功こそあれど劉邦が殺したいほど憎んでいた[雍齒](#)を真っ先に什方侯にした。これは、論功行賞で不平を招いて反乱が起きないための張良の策で、他の諸侯に「あの雍齒が賞せられたのだから、自分にもちゃんとした恩賞が下るだろう」と安心させる効果があった。

劉邦は最初[洛陽](#)を首都にしようと考えたが、[劉敬](#)が[長安](#)を首都にする利点を説き、張良もその意見に賛同すると、すぐさま長安に行幸し首都に定めた。

劉邦が家臣たちと酒宴を行っていた時、劉邦は「皆、わしが天下を勝ち取り、項羽が敗れた理由を言ってみよ」と言った。これに答えて[高起](#)と[王陵](#)が「陛下は傲慢で人を侮りません。これに対して項羽は仁慈で人を慈しみます。しかし陛下は功績があった者には惜しみなく領地を与え、天下の人々と利益を分かち合います。これに対して項羽は賢者を妬み、功績のある者に恩賞を与えようとしませんでした。これが天下を失った理由と存じます」と答えた。



劉邦は「貴公らは一を知って二を知らない。わしは張良のように策を帷幕の中に巡らし、勝ちを千里の外に決することは出来ない。わしは蕭何のように民を慰撫して補給を途絶えさせず、民を安心させることは出来ない。わしは韓信のように軍を率いて戦いに勝つことは出来ない。だが、わしはこの張良、蕭何、韓信という3人の英傑を見事に使いこなすことが出来た。反対に項羽は范増1人すら使いこなすことが出来なかった。これが、わしが天下を勝ち取った理由だ」と答え、その答えに群臣は敬服した。

では、最後の第8章を終わるに当たって、第1章で紹介した、霸王となった項羽によって左遷させられた劉邦が、最終的な戦い「四面楚歌」の場面をもう一度じっくりとご覧いただきたい。。

<https://www.youtube.com/watch?v=BRyvc5Kffmg>

## おわりに

関中の西安は、長安ともいうが、遣隋使や遣唐使が赴いたところでもあるし、「シルクロードの起点」でもあり、日本でもなじみ深い都である。もともと、西安は、周王朝が都をおいたのだが、そこに秦の始皇帝が都を置き、秦の滅亡後、劉邦もそこに都をおいた。その後の王朝も多くが西安を、都とした。洛陽は西安（長安）に近く、歴代王朝の中には、洛陽を都とした王朝もあった。邪馬台国の朝貢は、魏志倭人伝に出てくるのだが、当時、曹操の打ち立てた「魏」という国の都は洛陽にあったので、卑弥呼の使者は洛陽に行った。ひょっとしたら近くゆえに西安（長安）にも足を伸ばしたかもしれない。私の勝手な想像だが、ともかく西安（長安）と洛陽は中国の歴代王朝の都として栄えた国際都市であったのであることを御認識いただければありがたい。国際都市・西安（長安）。

邪馬台国については、私の「邪馬台国と古代史の最新」という論文があるので、それを是非ご覧いただきたい。奴国との争いが生じた時、魏の皇帝は、親魏倭王卑弥呼に黄幢を授与した。邪馬台国は、それを旗印に、多分、狗奴国の周辺の豪族を糾合し、狗奴国を降伏せしめることができた。魏の権威は、絶大であったと思う。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yamatai.pdf>

魏志倭人伝でいうところの魏という国は、三国時代の魏のことであるが、邪馬台国の使者が訪れた魏の王は、曹操の孫の曹叅（そう えい）である。遼東の公孫淵を破り朝鮮半島の支配圏を確立したのである。それを知った卑弥呼は直ちに魏の皇帝・曹叅（そう えい）に使者を送った。魏の皇帝・曹叅（そう えい）は、制書を発して卑弥呼に下賜品を与えるとともに、卑弥呼を「親魏倭王」に任じてその証である金印を与えた。

このように、三国時代、曹操の打ち立てた魏は日本とも非常に関係の深い国であるが、その強国となり得るきっかけとなたのが、関中における「五丈原の戦い」に勝利を取めたからである。劉邦の時代もそうであったが、関中を手中に収めるかどうか天下分け目の鍵

であったのである。劉邦を理解する上でも、是非、関中をそのようにご理解いただきたい。

三国志における劉備玄德は、漢王朝の末裔と自覚しながら、関中を一旦手中に入れる。後年、[五丈原の戦い](#)のときに、諸葛孔明が病死してから、劉備玄德は蜀の都・成都に退却し、曹操は関中を手中に収めるのだが、関中は、まさに曹操の魏に取っても劉備玄德の蜀にとっても、戦略上まさに重要なところであったのである。

劉備玄德が如何に関中を重視していたかは、次のホームページをご覧ください。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/ryuubikan.pdf>